

池上は、目覚めて一瞬とまどった。何もない部屋。新建材のにおい。そうだ、ここは単身者アパートなのだ。情報機器の製造会社、ミナト電子の課長である池上は、長野県に新設された工場に出向して、赴任一日目の朝を迎えた。

昨日の日曜日、池上は家を出た。何事もないように振る舞い、ちよつとした出張にでもできるように妻の直子に、「じゃ、いつてくる」と言っただけだった。直子も固い笑顔を作った。玄関で、靴をはいていると、直子が二階に向かって叫んだ。

「和也、お父さんが出かれますよ。下りてきなさい」靴を履き終わって、しばらく待ったが、二階のドアが開く気配はなかった。

「和也！」

「いいよ。和也を頼む。何かあったら、連絡してくれ」直子の視線を振り切るように家を後にした。車に乗る時に、二階を見上げると窓に和也の姿がちらりと見えた。

池上は、布団からでて窓を開けた。目の前に雪を戴いた山塊が屏風のようにそそりたっている。息を吸い込むと、ひんやりした空気に身体中の細胞が目覚めていく。いよいよ、これからが正念場だ。新工場の立ち上げで実績を上げれば、自分を売り込む絶好のチャンスになる。池上は、こぶしをにぎりしめた。

田圃の間の道路を通って、工場に向かった。田圃は、まだ田植え前だ。まだ冬の眠りからさめぬ荒涼とした田園風景の中に、灰色のビルが忽然と立っている。建物のまわりの空き地は、まだ造成途中で、あちこちに土砂や建材が積まれている。

ガラス張りの自動ドアを通して、本館に入る。白い壁がまぶしい。床は、カーペット張りだが、その上に段ボールを敷いて通路を作っている。まだ、内部も仕上げの最中なのだ。池上は、さっそく三階のフロアに行った。広々したフロアに、机が整然と並んでいる。三方が窓なので、室内は明るい。

ミナト電子は、小型コンピュータや端末機器を製造販売しているが、企業の情報化の波にのって、売り上げを順調に伸ばしてきた。そして、川崎市にある工場では増産に対応しきれなくなり、長野県に新工場を建設することになったのだ。池上は、新工場建設プロジェクトのメンバーであり、工場の神経系統とも言える情報システム開発チームの責任者をまかされていた。

池上は、新しい事務所の感触にひたっている暇はなかった。五月連休明けからの工場の本番稼働に向けて資材や設備の引っ越しは、連休中に行われる。その受

け入れ準備と最終チェックが池上を待っていた。

池上は、生産の流れに沿って工場を歩いてみた。部品メーカーから納入された部品は、納品書のバーコードを読ませて、ベルトコンベアで直接自動倉庫に入庫される。

三階の中間製品組立ラインには、ロボカーと呼ばれる自動搬送車が、電子音を奏でながら、何台も行きかっている。その横を歩いている時、池上は赴任前日の出来事を思い出していた。息子の和也は、中学二年生でそろそろ受験勉強に本腰を入れないといけない時期だが、勉強に身が入らない様子で暇さえあれば音楽を聴いていた。それを気にして、直子は何度も池上に意見してくれるように言っていたが、池上は仕事にかまけて放っておいた。その日夕食が終わって、自分の部屋に引き揚げる和也を、池上は呼び止めた。

「期末テストの結果はどうだったんだ、和也」

和也は、ソファにすわったまま答えない。「お母さんに聞いたんだが、中間より下がったらしいじゃないか」

直子も、キッチンから戻ってきて話しに加わった。

和也は、余計なこと言つてという目で直子をにらんだ。「先生にも、言われたわ。これから、みんながんばるから、今までちよつとよかったからって安心できないって。これからが大事なよ。和也」

「そうだぞ。うかうかしてたら、ろくな高校にいけないぞ」

池上もたたみかけた。

「るっせーな。わかつてるよ」

「わかつていたら、音楽ばかり聴いてないで勉強しろ」

「うるせーんだよ。早く長野でも、どこでも行けよ」

「なにー！」

今まで聞いたことのない和也の乱暴な言葉に、池上は我を忘れて手を振り上げていた。和也は手の甲で頬をさすって、上目使いに池上をにらむと部屋を出ていった。

他人には温厚な対応ができる池上だが、自分の子供には短気であった。頭では子供の話をよく聞いてやらなければとわかっているのだが、つい子供を責める言葉が口をついてしまう。昔は、二人で楽しくキャッチボールやサッカーで遊んだものなのにと、頭を振ったとたん池上は、ロボカーにぶつかりそうになった。池上は、はっとして今はそんなことを考えている時ではないと気を引き締めた。

この工場は、全体がコンピュータで制御された自動化工場になっていて、二十四時間稼働を前提にしている。したがって、工場全体を自動制御するシステムは、複雑で多岐にわたっている。

池上達のシステムの導入準備と評価は、時間との競争だった。個々のラインの自動化には、実績がある。しかし、全てのラインを統合した工場全体のシステム化となると話は別だ。評価はやった。しかし、あくまでも少量のデータでの標準的なケースのテストにすぎない。本番の膨大な生産では何が発生するかわからない。いくら評価をしても池上は、安心することはできなかった。

連休が明け、ついに工場の稼働開始日が来た。その日は、五月晴れであった。午前九時に、従業員全員が正面玄関前に集まって、開所式を行った。居並ぶ会社の幹部達は、稼働開始日の好天に上機嫌であった。そして、立ち替わりマイクの前に立ち、新工場の意義と今後の発展を威勢のよい言葉で繰り返した。

最前列に立っていた池上は、やっとここまでできたという感激とこれからの不安の間で揺れていた。ここまです引張ってきたのは、口先だけの幹部ではなく、プロジェクトの実行部隊の我々なのだと青空に胸を張りたくないと同時に、もしかしたらこれは大失敗の除幕式かもしれないと心が縮む思いがした。

式典は、記念植樹に移った。親会社の会長、社長、新会社の社長達が、苗木を植えた。係員に土を盛られた苗木は、そよ風に小さな葉をふるわせていた。たぶん、これらの木は、大切に管理され、この地に根付くだろう。それに比べ、新会社に出向してきた我々は、自分の力だけで、この地に根付いていかねばならないのだ。

式典が終わり、仕事が始まった。膨大な資材と人間数が多いだけで混乱は生じる。現場の人達は、初めての場所です勝手がわからない。とまどい右往左往して走りまわる。池上達の行ったシステムの教育などすっかり抜け落ちていた。しかも、移管してきた部品の入庫が完全には終わっていなかった。やむを得ず、入庫が全て終わるまで新規のライン投入を中止し、仕掛品だけを進めることになった。これだけで、池上は生産計画に影響を与えた事を悔やんだが、しかし、これはほんの序の口だった。三日後、ようやく移管品の入庫が終わり、出庫指示がいつせいかかった。作業に慣れない出庫係りに、出庫指示が集中したので、今度は出庫がパンクした。出庫の山を解消するには、機械も作業者も昼夜を通して働き続けるしかなかった。

池上は、出向と言ってもそれほど遠くないのだから、毎週土日には家に帰ろうと考えていた。しかし、もくろみは見事に外れた。土曜日は、生産の遅れを取り戻すために、ラインは動いていた。そして、池上達は現場から要求された改善のために日曜日にも出勤せざるをえなかった。

もちろん、池上自身が作業することはないのだが、部下にだけ働かせて休んでいるわけにはいかなかった。

そんな訳で、池上の単身アパートには、相変わらず家具らしいものは何もなかった。食事は三食とも会社の食堂で食べていた。アパートには、寝に帰るだけだった。当然ふとんは、敷きっぱなしになった。洗濯物が溜まって困ったが、幸いクーリング店が近くにあったので助かった。

ある日朝早く電話がなった。池上は、寝起きの声で電話に出た。

「大丈夫なの。あなた」

直子だった。

「ああ、なんだ。何かあったのか」

「なんだじゃないわよ。行ったり全然連絡がないんだもの、心配するでしょ。いつ電話してもいやしない

し」

「ああ、悪かった。忙しくてな。でも、元気だから、心配しなくていいから。そっちは、どうだ。和也はどうしてる」

「まあ、どうにかやってるわ。和也は相変わらず」

「そうか」

「ねえ、連絡したい時に会社に電話してもいい？」

「そうだな。緊急の場合は仕方ないが、アパートの電話を留守電にしとくから、それに入れといってくれ」

直子は、もっと話したい気配であったが、池上の方から切った。

池上は、職場の同僚の中では早く結婚した方だった。大学を卒業して会社に入社した時、独身寮で同室になった男が、サークル活動をしていた。新入社員で暇だった時、誘われて池上も面白半分についていった。直子もそこに来ていた。みんなでボーリングをした後で、近くの河原に行った。ジュースやお菓子が出て、政治の話になった。池上は、自民党政治を痛烈に批判する彼らに内心共感するところがあったが、常に批判的な立場をとり続けた。そして本能的に、これ以上深入りすると危険だと感じた。直子は、近くの会社に勤めていて、サークルにも入りたてのようだった。その後、池上は直子と二人だけで会うようになって、サークルには足を向けなかった。

結婚して、和也が生まれる前に直子は退職した。池上が、直子が家にいることを望んだのだ。それほど家庭を大切にしたいわけではないが、直子と結婚して十五年、離れて暮らすのは初めてのことだった。

単身者仲間の会話では、奥さんがたまに身の回りの世話とチェックにくるところもあるそうだが、直子は来なかった。和也を一人にしては来れないのだろうと思ったが、少し寂しさもあった。

工場の稼働開始から一か月が過ぎた。緊急対応の無理な残業に、そろそろ不満が溜まってきていた。池上がパソコンに向かって、報告書をまとめていると、中間製品組立ラインの課長の寺島が来て、部長の小野の前の椅子に腰掛けた。現場上がりの古参課長で、年は小野より上だ。

「いや、うちは暇で困るよ。作ろうにも部品がないんだから。これで、部品がきたらすぐ作れてあおられるんだから、たまらんよ」

ちらりと池上に視線を投げながら、小野に皮肉と泣き言を並べている。小野は、苦笑を浮かべながら、腰を少し浮かして頭を下げた。「申し訳ない。もうすぐ峠を越えるはずなので、もうしばらくご協力を」

「昔は、緊急だったら倉庫担当者に頭を下げれば、部品をとらしてくれたが、今じゃ、機械に頭を下げててもどうにもならんし。あそこに部品があるのがわかってるのに手が出せないのはつらいね」

「落ち着いたら、効率が上がってきますから」小野もなだめるのに懸命だ。寺島は言うだけ言うとし気が晴れたのか立ち上がりかけたが、何か思い出して再び座った。

「そう言えば、倉庫担当にありに行った時変な事言っとな。コンピュータの在庫数と現品数があわないちゅうんだ。だんだん差が大きくなっているそうだ」キーボードを打っていた池上の手が止まった。背すじが冷たくなった。「まさか」とつぶやいたが、声にならなかった。在庫数が違ってしまうことは、預金口座の残高が狂う事と同じで多くても少なくてもたいへんな問題だった。現品より在庫数が多いと、払い出しはかかるが物が無いということになり、反対だと、現品はあるのにさらに次の発注指示がかわかってしまう。影響は、次々に拡大していくのだ。

池上は、主任の江崎とすぐに調査にあたった。確かに寺島が言っていた口座は、在庫数がかなり違っていた。しかし、他の口座では一致しているものもあり、少しずれているものもあった。元々移管する前から在庫数が狂っていた可能性もあった。そう、思いたかった。しかし、安易に片付けていしまうには、事は重大だった。二人は在庫数の狂っている口座について、稼働以後の入出庫履歴を丹念に追っていた。すでに稼働して一か月を経過している履歴情報は、膨大な量であった。池上は、履歴を追いつながら、この履歴自体が正しく記録されているか不安になった。そう思うと今まで目で追っていた箇所がわからなくなり、また頁の最初からやりなおさなければならなかった。

時計は、夜十二時をまわっていた。池上達のまわりの人達は、みんな帰宅していて、遠くのフロアに人影がわずかに見えるだけだった。窓の外は、吸い込まれるような闇夜であり、事務所には二人のリストをめくる音が聞こえるだけだった。履歴の数字の矛盾点はいくつか見つかった。しかし、それがなぜ起きたのか。それらに共通する要因は、見あたらす、二人は推測される原因を言いかけてはそれに矛盾するデータの前に、「うーん」と考え込んでしまえばかりであった。今度は、プログラムのソースリストを広げて、プログラムのロジックから、履歴の数字を説明しようと試みた。プログラムの先頭から、何度もロジックをたどってみた。疲労こんぱいした頭は、空回りしてプログラムは完ぺきに見えた。不思議と眠気はないが、頭はまわらない。夢の中で必死に逃げようとしているのに、身体が金縛りにあって動けない時の気持ちに似ている。そのうち、真っ暗だった窓の外が、白んできた。池上は、洗面所に顔を洗いにいった。池上は、鏡に映った自分の顔を見た。油のうきでた顔、目に生氣がなかった。池上は、ひげの濃くなった頬を両手でたいて、「くそつたれめ」とつぶやいた。

バグ（プログラムの間違い）は、ひとつではないだろう。全ての口座の履歴をしらみつぶしにあたらないと、バグがなくなつたとは言いきれない。それに、狂ってしまった在庫数を修正する方策も考えねばならない。資材の口座数は、十数万もある。池上は、めまいを感じ、洗面台に両手をついた。

プログラム開発を委託している協力会社の山根達が、出勤してきた。現象を説明して、プログラムを見直させると、バグが一つ見つかった。池上は、頭を下

げる山根を殴りつけてやりたい気持ちをとんとかこらえた。こいつを殴ったところで、事態は元に戻りしないのだ。池上は、すぐに小野の席にいき、状況を説明した。うつむいていた池上の頭の上から下りてきた小野の言葉は、意外に柔らかだった。

「そうか、わかった。最初だから、こういうこともあるさ。徹夜して、ごころうさん。常務には、私から説明しておく」

小野は、これで全てバグがなくなったと誤解している。池上は、まだバグがあると言おうとしたが、小野に電話がかかってきたので、言いそびれてしまった。マシン室に戻りながら、池上は今日中にバグを見つけてしまえばいいのだと考えた。ドアを開けて、部屋に入ると山根達が、輪になって笑っていた。頭の隅でいけないと思いつつ、つきあけてきた怒りはとどめようがなかった。

「なにやってるんだ。今、どういう状況か、わかっているのか」

初めて聞く池上の怒鳴り声に、山根達は、しばらく、びくくりした顔で池上を見ていた。池上は、興奮してうわずった声で、山根に向かって言った。

「今度のバグで、在庫がすっかりめちやくちやになつてしまった。あんたの会社に要求して責任をとってもらうからな」

山根は、呆然と立っている。池上は、少し言い過ぎたと思った。そして、ここで怒りを爆発させても、醜態をさらけだすだけだと悟って、山根に吐き捨てるように言った。

「とにかく、今日中に残りのバグを全て見つけるんだ」池上があたりを見渡すと、何人かが白けた顔をして席に戻って行った。

池上は、その日も定時までがんばったが、バグ取りは、思うように進まなかった。池上は、重い足どりでアパートに帰った。部屋に入って留守電を押すとメッセージが入っていた。

「お父さん。今度帰ってきた時に、相談したい事があるんだけど。なるべく、早く帰ってこれないですか」

池上は、直子の声を久しぶりに聞いた気がした。すぐに家に電話をしようと思ったが、睡魔に負けて、服をぬぐと、ふとんに倒れ込んだ。次の日も、その次の日も池上にとって地獄のような日々が続いた。朝、会社の席につくとバグ票が積み重なっていた。部長の小野は、池上に対し、苦虫をかみつぶしたような顔しか向けなくなった。電話がなると、心臓の鼓動が速くなり、冷や汗がでた。倉庫の管理者からは、悲鳴のような訴えがあった。会社の幹部からも直接聞いた。だされた。生産の遅れは、挽回しようがなくなり、製品の出荷にも影響がでるようになっていた。

二

七月中旬の昼休み時間、池上はとぼとぼと廊下を歩いていた。窓の外は、焼き付けるような日差しだが、強力な空調が効いた工場の中は別世界のように涼し

い。天井も壁も真っ白で、反射する光が疲れた目には苦痛だ。この工場は新しく、何もかもが合理的に寸分の隙もなく作られている。池上は、川崎の古い工場が懐かしかった。壁は、汚れていた。夏は、中も外と変わらない程の暑さだった。ラインは、あちこちに分散していて、スマートなラインとは言えなかった。でも、そこには長い年月でできた労働のリズムがあり、人と物の流れに落ち着いた余裕があった。

池上達は、約一か月におよぶ泥沼の中でもがくような苦勞の末に、システムのバグを除去することができた。先ほど、小野は江崎を連れて、常務に今後のシステムの正常化計画について説明にいった。改善対策の作成には、池上也加わったので、内容は知っている。しかし、小野は江崎だけを連れていった。そのことが、池上の心にひっかかっていた。

「よお、背中がまるいよ。池上君」

振り返ると製造部の寺島課長だった。この人は、いつも人の内側にもずけずけと踏み込んでくる。最初のバグの指摘もこの人だった。でも、根がさっぱりとした人だから、不思議と憎めない。

「寺さんは、元気ですね。もう、夏バテで」

「だめだめ。これから、今までの遅れを挽回しなくちゃならないんだから。元氣ださなきゃ。家に帰って充電してる？」

そう言っ、寺島はちょうど開いたエレベータに飛び乗っていった。

直子から電話があったが、池上は、それから一か月近く家に帰っていない。バグが出てからは徹夜や休日出勤でとても家に帰るどころではなかった。でも、さすがに家のことも気になった。どうにか、システムの混乱も収束の見通しがつきそうなので、週末には久しぶりに家に帰ろうと池上は思った。

しかし、金曜日にはシステムのトラブルで引き延ばしにしてきた山根達の送別会があった。池上は、山根達を下請けとかではなく、パートナーとして公平に扱いたいと考えていたが、トラブルになるとそんな悠長なことは言っていられない。社員よりも協力会社に徹底的に仕事をおしかぶせた。徹夜の連続で、山根などは、青白い顔をしてやっと仕事をしていった。重圧からの解放感からか、山根達は夜遅くまで大騒ぎをしていた。

翌日の土曜日、池上が車で東京近郊の我家に着いたのは昼過ぎだった。

「忙しいのね」

着替えてリビングのソファにすわり、一気に麦茶を飲み干した池上に、直子が言った。「まあな、工場立ち上げのトラブルがあつて、ずーっと休み無しだ。でも、なんとか落ちつてきたから」

「和也は？」

「今日は、学校」

それから、二人とも黙って、次の言葉をさがしていた。直子は、飲み終えたコップを両手でもて遊んでいた。

池上は、部屋が暑いので、冷房の調整に立ち上がった。

た。すると、直子が「冷房を余りきかさないで」と言った。池上が振り返って、サイドテーブルを見ると白い大きな薬の袋がおいてあった。取り上げると、直子の名前が書いてあった。

「なんだ。これ？」

池上が、袋を直子にさしだした。

「私の薬」

「だから、なんの薬かって聞いているんだ」

「自律神経失調症の薬」

直子は、聞かれたことしか答えなくて、ぼんやりと気だるそうに座っている。池上は、ようやく直子の様子がおかしいことに、気づいた。

「どうしたんだ。自律神経って？」

「病院の先生は、別にどこも異常ないっていうの。でも、夜は心臓がドキドキしてねむれなくて、どうにか、なっちゃいそうだし。昼間は、身体がだるくて」

「なんで、連絡しなかったんだ」
それを聞くと、直子は、口元でかすかに笑って言った。

「連絡したじゃない」

「いつからなんだ」

「六月くらいから」
留守電をもらった頃、帰ってきてといわれても、とても仕事の手を離せる状況ではなかった。池上は、それを説明しようと思ったが、やめた。

窓の外は、蟬時雨だった。二人は、黙って窓の外を見ていた。その時、玄関の開く音がして、和也が、帰ってきた。池上がいるのを見ると、和也は不思議そうな顔をした。

「何かあったの」

「やっ、と、仕事が一息ついてな。元氣か」

「ああ」

父と息子の会話は少なかった。

和也は、会話を避けるように二階に上がって行った。

日曜日、池上は十時過ぎにようやく寝床を離れ、一階の居間に下りた。休日でも早く起きる池上にはめずらしいことだった。わが家に帰ってきて、ほっとして連日の疲れが出たのか身体が重かった。パジャマ姿のままテーブルの椅子にすわって、新聞をひろげた。

掃除機を持った直子が入って来た。

「疲れているようなので、起こさなかったけど。どうします、お食事」

「朝は、いい。食欲ないんだ」

池上は、新聞から目を離さずに答えた。

「身体にさわりますよ。向こうでもそうなんですか」

「向こうでは、三食会社の食堂で食べてる」

「バランスがとれているのかしら」

直子はつぶやいたが、それ以上池上に朝食をすすめもしなかった。そして、居間に掃除機をかけ始めた。

「身体、大丈夫なのか。無理するなよ」

「誰かがやらないと、だめでしょ」

そして、椅子に腰掛けている池上をじやまそうにしている。池上は新聞を持って和室に移動した。居間の掃除を終えた直子が、和室に来るのを目の端でと

らえた池上が立ち上がろうとした時、直子が、二階を見上げて言った。

「和也、犬のエサがないから、買ってきてちょうだい」
二階の反応はない。

「俺が、いこうか」

池上が新聞を置いて言った時、和也が顔を出した。

「いいよ、雨がふるから」

「一雨来た方がいいんだ」

結局、散歩がてらに二人で犬のえさを買いに行くことになった。すでに夏の太陽が、照りつけていた。日差しを避けるように、二人は街路樹の生い茂った遊歩道を選んで歩いた。

小さな公園の側を歩いていたら、後ろで自転車の鈴が鳴った。振り返ろうとした二人の横を、出前のかっこうをした少年が、「オッス」と声をかけて通りすぎた。和也も手を上げて応えた。

「友達か」

「友達というほどでもないけど、同じクラスだよ」

「バイトか。偉いな」

「あいつの家は、小さな食堂やってるんだ。進学するつもりなくて、家の手伝いするんだってさ。いいよな、気楽で。」

「和也は、もう志望校は決めたのか」

池上は、この前のような失敗は繰り返すまいと努めて穏やかに聞いた。

「まだ」

「そうか。でも、そろそろはっきり目標を決めないといけないんじゃないか」

「いいよ。父さんは、心配しなくても。母さんと相談して決めるから」

そう言うと、和也は足を早めて先に行ってしまった。池上は、立ち止まって和也の後ろ姿を追いつつ、ため息をついた。父親の期待というのは、なかなか子供には伝わらないものだ。あるいは、和也も分かっているのかもしれないが、反発したい時期なのかもしれない。確かに心を通わせる為の会話も行動も絶対的に足りないのは理解しているが、では実際どのようにすればよいのか池上には正直言ってわからなかった。

家に帰ると直子から、換気扇の音が大きいとか、風呂の排水の具合が悪いとか言われたが、何も手をつけないうちに夕方になった。月曜日の朝にも打ち合わせが入っていたので、池上は今夜のうちに単身者アパートに帰らなければならなかった。

直子が、早めに用意した夕食を家族で、囲んだ。これから、夜中に長時間車を運転していかねばならないので気が重かったが、池上は努めて明るく振舞った。「うまいんだな、これが。母さんの肉じゃが」
「それ、もう古いよ。新しいギャグにしなよ」
「いいわよ。うまいなら、もっと帰ってきて下さいな。肉じゃがぐらい毎週作ってあげますよ」

「また、来週帰ってこれるの。父さん」

和也に聞かれて、池上は生返事したまま即答できなかった。すると和也が、すぐに言った。

「忙しいんだもの、無理しなくてもいいよ」

「いや、大丈夫だ。帰ってくるよ」

池上は、自分に言い聞かせるようにうなずきながら言った。しかし、来週は帰れそうにないのは池上自身よくわかっていた。それから、三人とも黙りがちになった。

池上が、家を後にしたのは、午後七時頃だった。直子が下着やYシャツの包をもって、家の前までできた。車に乗り込む池上に、直子は言った。

「バランス考えて、ちゃんと食事とってくださいね」

「ああ、おまえも身体に気をつけてな。それから、和也のことだけど。・・・」

「えっ、何」

「いや、なんでもない」

池上は直子を見上げて、一息おいてエンジンをかけた。直子は、口元でちよつと笑って、手をあげた。池上は、今度帰った時には和也を交えて、しっかり話し合おうと思った。

バックミラーの中の直子の姿は、すぐに夕闇に消えた。池上は、沈む気持ちを切り替えるように車のスピードを上げた。

三

年の暮れ頃になると、工場の中も落ち着きができてきた。真つ白だった工場の壁にも、所々に擦り傷や油污れがついてきて、人も設備もなじんできた感じだ。

池上は、工場が安定してきたのを喜んでいたら、生産量が低下してきたせいでもあった。それは、未曾有の好況を呈していた平成の好景気にかげりがさしてきたことに他ならなかった。

年が明けると景気の後退は、いよいよはつきりと現れてきた。膨張を重ねてきたバブルが、はじけたのだ。地価の値上がり神話が崩れ、土地投機に狂奔していた金融機関が莫大な不良債権をかかえて行き詰まった。情報化投資に熱心だった金融機関が、いっきに設備投資を絞った影響は、ミナト電子に直接響いた。売上が急減し、工場ではラインの空気が目だつようになった。会社は、徹底した経費節減を指示し、残業は原則ゼロ、節電のため昼休みには、事務所の天井灯を消すことになった。一般社員は、定時間で早く帰ったが、池上達管理職は、部下に回せない分、夜遅くまで仕事があった。管理職は、好況の時も忙しく、不況の時もさらに忙しい。

ある日池上は、七階にある食堂の窓際の席にすわって、白銀で化粧した屏風のような山の連なりをながめながら、昼食をとっていた。そこへ、お盆をもって歩いてきた一人の男が、池上に背を向けてテーブルにすわった。すると、横の席でおしやべりに花をさかせていた若い女性達が、一瞬静かになり、その男の背中に視線を投げた。

その男は、購買部の某課長だった。池上とも顔なじみだ。話し好きな男だから、池上に気づいたら、池上のテーブルにくるはずだが、向こうで避けていったように感じた。池上も女性達が、投げた視線の意味を知

っていた。

彼も、単身赴任で来ていた。うわさでは、部下の若い女性と仲良くなり、その女性が妊娠したらいいのだ。池上も、その女性を知っているが、長い黒髪が美しい人だったが、最近会社を休んでいる。

テーブルにかがみこむようにして、食べている男の後ろ姿には、疲労がにじみでている。頭には白いものも混じっている。優秀な管理者で、上のポストも見えていたはずだ。会社のルールを知り尽くしていた彼が、なぜ道を踏み外してしまったのだろう。池上は男から目をそらすと『俺は絶対そんなへまはしない』と心の中でつぶやいた。そして、うつむいて食事をかきこみはじめた池上は、もうその男のことは忘れていた。

それから、ほどなくして相手の女性は、会社をやめた。普通、退職の時は回覧文書が、回ってくるのだが、それもない寂しい退職だった。当然、風当たりは男に向かつて強かった。次の人事異動の時は、左遷されるだろうと無責任なうわさは容赦なかった。

池上も人事異動には、アンテナが高い方だった。誰が上がるか、いろいろな人脈にそれとなくさぐりをいれていた。部長の小野は、もう長いから動くかもしれない。自分も工場建設では相当働いたので、もしかしたら可能性があるかもしれないと期待が頭をもたげてくるのだった。

二月初旬に、会議があつて、池上は都内にあるミナト電子の本社にでかけた。会議の合間に、営業にいる同期の沢田を尋ねた。幸い沢田に会えて、二人は定時に、近くのスナックで会う事にした。

「田舎の単身アパート暮らしだから、久しぶりだな。こういう所で飲むのは」

「俺だって、そうしょっちゅう飲んでる訳じゃない。特に、最近は交際費も厳しくてな」やっぱり、売れんのか」

「ああ、さっぱりだ。まあ、俺がこんな時間に飲んでいくくらいだからな。不況の影響もあるけど、世の中の流れが変わってきている。今度、新製品の発表に合わせて、組織もだいたい変えるだろう。新製品対応の技術、営業部門ができるらしい」

「大幅な組織変更か」

「ああ、市場の変化への対応が大義名分だが、円高や不況に対するリストラが本当の狙いだ」

そこで、沢田は声を落として、周囲にはばかりうようにつけ加えた。

「これは、本当に丸秘だが、長野ミナトも問題になっている」

「えっ、なんだって」

「長野ミナトは、バブル時の売上増加を前提にして、過大な設備投資を行った。その固定費が重い負担になっている。建設時の経営見通しが甘かったという意見が上層部でも出始めているらしい。建設のやり方も、けっこう強引だったからな」

池上には、初めて耳にする話だった。

「回収計画が遅れるという話は聞いていたが、まさか。・・・でも、また景気がよくなれば」

「まあ、そう期待したいが、そう甘くないだろうな。今回の不況は単なる循環的な不況じゃなくて、市場の構造変化も同時進行しているからな。信じられないことだが、今や我々は構造不況業種って奴だ。ひとつの甘い判断が、会社の命取りになる。しかし、つけを回されるのはそういう決定をした奴じゃなくて、いつも下っ端だ。特に我々みたいな中間管理職が一番あぶない。組合員じゃないし、会社は紙切れ一枚でどうにもできるからな」

いつもは、威勢のよい沢田だったので、池上にもその不安感が、直に伝ってきた。それにしても、二年前の新工場説明会での幹部達の言葉はなんだったのか。新工場を作って、三年で売上げ倍増。長野に行つて、事業拡大の礎になろう。威勢の良い言葉の裏付けはなんだったのか。

「まあ、お互い明日はどうなるかわからん身だつてことだ。ところで、奥さんは元気かね」

それから、二人は少し家族の話をして、早めに店をでた。

家に帰ると、真つ暗だった。明かりをつけて、カバンをソファに投げだした。冷蔵庫の中にビールはなかった。今日、帰るとは連絡してなかった。でも、帰ると家には、家族がいるものと思っていたので、肩すかしをくつたような気がした。しばらくして、和也が帰ってきた。

「おっ、和也か。どこへいつてたんだ」

「塾だよ。最後の追い込み」

「そうか、母さんは？」

「知らない。けっこう最近遅いんだ」

そういうと、和也は「ああ、腹へった。腹へった」といいながら、冷蔵庫から皿に盛りつけられたスパゲッティを取り出して、電子レンジで暖めだした。

「おまえもそんな生活しているのか。それじゃ、俺と同じじゃないか」

「まあね、今から単身赴任の練習」

和也の言葉に、池上は苦笑いするしかなかった。

直子が帰ってきたのは、午後十一時を過ぎていた。池上を見て、直子は驚いた顔をした。直子は、明るい色のスーツを着て、若々しく装っていた。そして、何より日頃は見せないはずんだ表情をしていた。

「こんなに遅くまで出歩いていたら、身体に悪いだろう。自律神経はもういいのか」

「大丈夫よ。病気は気からっていうでしょ。家の中で、うじうじしていてもだめなのよ」

池上は、アルコールでも入っているのかと思ったが、そうでもないらしい。直子が元気なのはいいことだが、池上は、おさまりがつかず、もう一言不満を言った。

「まあ、出歩くなと言っている訳じゃないけど、夕食前には帰ってこないと、和也も大事な時だし、かわいそうじゃないか」

「和也には悪かったわ。でも、何もかもやってもらわないとできないというのも困るわよね。身の回りのことくらい一人でできなくちゃね」

その言い方が、あまりにもさっぱりしていたので、

和也も思わず食事の手を止めて、池上と目を合わせた。いつも池上や和也に気を使っただけの直子とは違う雰囲気があった。

翌日は、土曜日だった。直子はすでに起きて、台所に立っていた。和也は、かき込むようにご飯をたべると学校に行った。

二人で朝の連続テレビ小説を見ながら食事をしてる時、池上は直子に言った。

「そろそろ梅の時期だな。二人で梅見に行ってみないか」

直子は、池上の方を見て、ちょっと驚いた顔をして答えた。

「めずらし。あなたから誘うなんて。そうね、公園の梅が見頃だって、誰か言ってたわ」

車で、公園にいき外にでると風が頬に冷たかった。池上は皮のジャンパーのポケットに手をつこんで歩いた。いつもの癖で、一人でどんどん歩いて行きそうになる。池上は、直子の歩調に合わせて、少しゆっくりと歩いた。直子は、黒いコートを着ていて、えりまきで顔をかくすようにしていた。

「ひさしぶりね。あなたと二人で歩くなんて、何年ぶりかしら」

園内には、年配の夫婦連れが何組かいた。池上と直子はじっくりとひとつひとつ見て回った。池上は、ごつごつした枝に咲く白梅が気に入った。花は少ないが、清楚で、寒い風に立ち向かう凜とした風情があった。池上は、その梅をしばらく見ていた。花をこんなに長く見ていたことは、いままでもなかった。

二人は、梅園のはずれにある古いベンチに腰掛けた。しばらく二人とも無言で、あたりの景色を見ていたが、直子が口を開いた。

「昨日は、学校の世話役の話し合いだったの。卒業を控えてるでしょ。役員だから、何度も打ち合わせがあつて、たいへんだわ」

「そうか、最後の最後までたいへんだな」

池上は、いたわる気持ちで自然に言葉になった。結局、和也の進路のことも直子と和也で決め、池上は最後の確認をただけだった。三者面談、学校訪問も全て、直子が一人でやった。普通の主婦なら、当然やっていることではあるが、病んだ神経をかかえ、まともに相談できる相手もない状況での負担は、たいへんなものだったろう。

池上は、ベンチの背にもたれて、冬の空をみあげた。その時、直子が、池上の腕をとって、顔を池上の肩によせながら言った。

「ねえ、いつ帰って来れるの。私、疲れちゃうわ」

池上は、直子の横顔をのぞき込んだ。長いまつげがとまどいがちに揺れている。池上は、直子の問いに答えることができなかった。太陽が雲にかくれたのか、さしていた柔らかな日差しがとだえた。冷たい風の中で二人は、寄り添って空の彼方を見つめていた。

三月に、突然長野ミナトの社長と常務が交替した。今までの社長と常務は、新工場建設を強力に推進してきた人達だった。それからは、業績が悪化しているという幹部会議の話しが、繰り返し下りてきた。それを池上達も部下に機械的に流していた。人員削減計画も立てられていた。今後三年間に四十%の人員を削減するというものだった。そういう話しが何の抵抗もなく、当然のように流され受け入れられていた。職場には、重苦しい空気が沈澱していった。

ある日の午後、池上は部長の小野に呼ばれた。

「池上君、今度の予算だけど経費節減の指示がきてね。君の所も30%カットしてほしいんだ」

「ああ、知ってる通りの業績だから、私も抵抗しようがないよ。こういう時は、肅々と言われた通りやるしかないんだ」

「協力会社を減らすしかないですね」

「うむ。人を減らしてもサポートの質を落とす訳にはいかんからな。まあ、付録のような者から選んでくれ」

あまりに露骨に言われると池上の心にも反発した。気持ちがいまいた。人を減らせばサポートの質も下がりますよという言葉がかかったが、池上はのどの奥で押しとどめた。池上が下がるうとした時、

小野が思いだしたように言った。

「ああ、そうそう。明後日清泉ソフトの山下さんが来るそうなんだ。ちょっと、私は外出だからよろしく頼むよ」

そう言っ、小野は席を立つていった。その後姿を、池上はぼうぜんと見送った。山下は今後の仕事の念押しにくるに違いない。山下には、工場稼働立ち上げ時に助けてもらった借りがある。その山下の所も30%カットしなければならぬのだ。山下がおいそれと受け入れる訳がない。あの時、山下に仕事の約束したのは、小野ではないか。なんで、その後始末を俺がやらなければならぬのかと池上は、腹がたつてしかなかった。

協力会社の横を通りながら、池上は彼らの仕事ぶりを見た。仕事に追われて、画面にかじりついている者もいる。仕事の内容も忙しさも社員と変わるところはない。いつもは、いっしょに働いている仲間だ。しかし、社員とは違って、こっちの都合ひとつで、簡単に切ってしまう。もちろん、彼らは自分の会社に戻って、また別の仕事につくのだから、こっちの心配することではないのだと池上は考えた。しかし、不況の中では派遣先から戻されて次の仕事もなく自宅待機となり、そのまま解雇につながる者も多いことを池上も知っていた。

仕方ないじゃないか。俺に何ができるというのだ。彼らの運命というべきことじゃないか。池上は工場の長い階段を下りながら考えていた。足がつまづき、あやうくころげ落ちそうになったが、なんとかかみどどまった。階段の下は暗く、池上はこのまま深い淵に飲まれそうな錯覚を覚えた。池上は、階段の途中で手すりにつかまって立ちどまり、下の暗闇に目をこらした。

その朝は、いつもと変わらない天気のよい朝だった。仕事が始まって、机の上の回覧文書を片づけていた池上は、小野が江崎の席へ行き耳打ちするのを見た。江崎は、立ち上がった急ぎ足で、通路にでていった。それを見て、池上は今日は内示の日だったことを思いだした。課長試験に合格していた江崎が、内示を受けるのは当然のことだ。しかし、不可解な事に小野は、そのまま池上の前に来た。

「池上君、常務のところへ行ってくれ」

池上は、小野の言葉が理解できなかった。なんだって、俺がなんで常務のところへ行くのだ。俺にも内示があるのか。

常務の部屋のドアをたたく時、池上は胸の動悸が高鳴るのを抑えることができなかった。ちょうどその時、江崎が出てきた。江崎は、複雑な表情で一瞬池上を見たが、すぐ顔をそらして出て行った。

禿頭の常務は、血色のよい笑顔で立っていたが、池上を見て表情をあらためた。

「池上君も知っての通り、今、ミナト電子グループは、創立以来の危機にある。特に、長野ミナトは、グループの負担になっていて、どうしてもスリム化が必要だ。業績悪化の原因としては、工場立ち上げ時のつまずきも痛手だった。池上君には、今度 東和興業に行ってください」

池上は、直立不動で常務の話を聞いていたが、頭の中では血流がががが音を立てて流れていた。東和興業は、ミナト電子の小さな下請け会社だ。なんで俺が、そんな所へ行かなければいけないんだ。

席に帰っても、何も手につかなかった。そして、まわりから針のような視線を感じた。池上が、顔をあげて見まわすと、みんな池上の目を避けるように、よそよそしく仕事をしている。

池上は、その日早々と退社したが、アパートに帰ってもむしゃくしゃして、何もする気になれなかった。池上は、車を運転して、前に宴会で行ったことのある居酒屋に出かけた。いやなことを忘れてしまいたい。酒をコップで浴びるように飲んだがなかなか酔わなかった。逆にいまいまいしい常務や小野の顔が突き上げるように脳裏に浮かんだ。常務は、まるで立ち上げ時の失敗の責任が、全て池上にあるような言い方をしていた。もしかしたら、小野が常務にそのように報告したのかもしれない。池上は、テーブルの上にあるコップをつかんでぶん投げかけたが、やっと思いとどまった。

池上は、手に持ったコップをテーブルに置くと、店をでた。夜風がほてった頬を快くなで、次第に気持ち静まってきた。車に乗ろうとしてつまづき、池上は自分の酔いに気がついた。池上は、店にこたわって車を置いて帰ることにした。最初は、大通りにでてタクシーをひろうつもりだったが、池上はよろけながら歩き続けた。するとだんだん、それが今の自分にふさわしい姿のように思えて、池上はすれ違う人の変な目付きも気にせず、つまづきよろけながら歩いた。もうろ

うとした頭に小野が江崎だけを連れて常務に今後の方針について説明にいったこと、その時江崎が池上を見た同情的な眼差しの意味がはつきりと見えてきた。道は、川の土手の上に来ていた。池上は、疲労を覚えて、河原でひと休みしようと、土手を下り始めた。二、三步下りた所で、池上は身体バランスを失った。土手に生えた草に足をとられたのだ。大きな弧を描いて池上の身体は、土手を転がり落ちていった。夜の十時を過ぎて、人通りの途絶えた川べりであった。

幸い池上は、水の中までは落ちなかった。池上は、目をさました。何時間か気を失っていたらしい。肩が痛んだ。ころがった時打ったらしい。仰向けになってみた。痛むのは、肩だけのようにだ。耳元で、悠然とながれる水の音がした。目を開けると、すばらしい星空だった。ぼんやりした頭の中で、確か前にもこんな星空を見たことがあると池上は思った。ずーっと遠い昔のことだった。池上は、大の字になったまま、川の水音と星座の世界に浸っていた。

その週末、家に帰った池上は異動のことを直子に切り出すことが、なかなかできなかった。

「来月から、東京に戻ることにした」

池上が、やっと打ち明けると直子は、大きな目を見開いた。

「本当。でも、うれしそうじゃないわね。何かあったの」

直子もさすがに気づいたようだ。

「リストラだな。出向から出向で、小さな関連会社の課長じゃ、いやならやめろと言われているようなものだ」

「えー、ひどい」

「どれだけ会社に尽くしたのかわからないのにね」

つぶやくように言う直子も眉を曇らせて黙り込んだ。二人して、しばらく無言であった。しかし、池上も直子に告げると何やら胸のつかえが少し軽くなった気がした。しばらくして、直子が口を開いた。

「こんな時になんだけど。わたしね、働こうかかって思うの」

「何。大丈夫だ。俺が会社にしがみついたら、おまえが働きにでなくても、やっていけるさ」

「違うの。話してなかったけど、学校の世話役の人に誘われて、子育て読書会って会に参加してるの。そこで会った働いているお母さんって、たくましくて生き生きしているのよ。地に足がついているっていうか、何かが違うのよね。私とは」

「それで働こうって、思ったのか。身体は大丈夫なのか」

「最近はずいぶん良くなってきたから。それに、私があんまり和也にかかわりすぎたら、かえってあの子を追いつ込んでしまう気がするし」

少し間を置いてから直子は続けた。

「ねえ、昔二人で、サークルに行ってたことがあったでしょ。覚えてる」

「ああ、出会った所だものな」

池上も、直子につられて遠くを見る目になった。

「あの頃、ちょっと感じたようなわくわくするような感じなの。新しい世界に入るみたいで」

「なんだ。おまえは続けたかったのか。サークル」

「あの時の事は、後悔してないわ。でも、今度は自分で決めて進んで行こうと思うの。でも、今からじゃ、遅いかな」

直子は、頬を染めて懸命に話している。池上は、出会ったばかりの直子を思い出した。

「人間、いくつになっても遅すぎるってことはないさ。遠回りして勉強したと思えばいいさ。働きたければ、働けばいい。甲斐性無しの亭主は、何も言えんさ」

池上はそう言って、照れ臭さをこまかした。

五

辞令を受けて、あいさつ回り、送別会とあわただしい日々が過ぎた。離任の日が近づいたある日、池上は昼休みに職場にいるのも窮屈なので、外に出た。建物のまわりをぶらぶら歩いていると、記念樹のところに来た。植樹の時の光景が、つい昨日のことのように思い出された。この木は、まだ細く背も低い若木だ。でも、植えられて一年経つので、枝振りもしっかりして、地面に根付き、自分の存在を主張している。あの時、池上は、この木のように何人この地に根付くことができるのだろうかと考えたが、自分が真っ先に振り落とされるとは夢にも思わなかった。

「池上さん」

感慨にふけていた池上は、突然後ろから声をかけられて驚いた。江崎だった。

「池上さん、本当に色々お世話になり、ありがとうございしました」

江崎に、深々とおじぎをされて、池上は、とまどった。

「なんだい、急にあらたまつて。君の力だよ。これからも、がんばってくれよ」

江崎は、池上の後がまになることを気にしていたのだろう。池上もそんな事は考えないようにしていたが、この所江崎との会話がなんとなく堅苦しいものになっていたのは事実だった。二人は、並んで記念樹を見た。

「それにしても、江崎君も長くなりそうだな。家族を呼ぶとか考えた方がいいんじゃないか」「ええ」

江崎の返事は、それだけでどうするとも答えなかった。江崎は、東京に新婚の妻と脳溢血で半身不随になった母親を残してきていた。江崎の妻が、母親の看病をするために残ったのだ。池上は、江崎が単身赴任すると言った時の面接を思い出した。江崎の横顔を見ながら、この男も結局は俺と同じ道を歩むことになるに違いないと池上は思った。

「我々は、人間だ。木のように、簡単にあっちこっちに移し変えられん」

池上は、小さくつぶやいた。この木は、これから世の中の好不況にかかわらず成長していくだろう。それは、まるで働く者の全てを吸い上げて肥え太ってい

く不気味な怪物のように池上には思えてきた。風が吹いてきた。その時、池上は記念樹が枝葉をゆすつて低く笑ったような気がした。